
天空の奇跡

風谷 空

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

天空の奇跡

【Nコード】

N2362I

【作者名】

風谷 空

【あらすじ】

同じ年の親友、レインとガインはいつもどつりの日々をすごしていた

ある日、稽古をしている最中いつもと違う出来事が起こった。

いつもが終わった時（前書き）

ある日のいつもどつりの日々のこと・・・

いつもが終わった時

『おゝい、遊びに来てやったぞ』

聞きなれた声が俺の家に響きわたる。

『わかった、今行く!!』と俺の返事。

俺はいつも暇さえあれば親友のラインと遊んでる。

実際、遊びではなく稽古だが、俺らは師の下を離れてやってるからまあ、遊びみたいなもんだ。

『最近の調子はどうよ? レイン。』

『いつも言ってるんだろ、ボチボチだって。』

『まあカリカリすんな、心配してやってんだ。』

ああゝめんどい、いちいち心配なんかいるかって・・・

『はいはい、どうも。』

ったくめんどいつたらねえや。

あいつの人の良さは俺と同じ年とは思えない

『ところで? アレクスさんは大丈夫か?』

アレクスっていうのは俺の父親だ。

『まあ、治ってはきてるけどまだまだかなあゝ』

『はやく、あの人から剣術おそわりたいぜ』

『ふう・・・』

もうこの話をするのは3日連続だ・・・

そう思いながらも、いつもの場所にむかった。

そしていつもどりの稽古になるもんだと思っていた。

『ふうゝ、ここらでチヨイと休憩』

『んだよライン! もう休憩か? 健康な15歳とは思えぬスタミナだな。』

『お前とは、経験の差があるんだよ、経験の差がな。』

2回繰り返さなくてもわかるって・・・

『しかも、お前はスタミナ馬鹿だし、持久力馬鹿だし・・・』

『っあゝ、同じこと2回言わなくていいって！

一回ボコッて埋めたるか・・・

ガサッ！ ガサガサ！！

おっと魔物かな・・・？

『俺はもう疲れてる、レイン魔物任していいか？』

『了解。かるゝく片付けてくるよ』

ガサ！・・・

ん？逃げたかな

なんだ、つまん・・・

『ぐあゝゝゝゝ！！』

すかさず振り返る。

ガインが足を切られてる、魔物は？

レインが敵を探してる内に今度はレインの背後にまわってきた。
相手の爪をよけ体制をなおす。

『なんだこいつ・・・』

そこから出る弱い魔物じゃない。

ライオンと、鳥をまぜたようなやつ

ゲームでいうとキマイラみたいなやつだ・・・

こんなよくわからんことを考える余裕はあった。

しかし相手のスピードについていけず、足でけられた。

まずい・・・

だが、その魔物はレインと見ずガインに襲い掛かった。

レインがよけられないものを、怪我してるガインが避けられるはずがない。

『ガイン、逃げろ！早く！』

しかし、魔物の方がはやくガインを喰らう体制に入っていた。

やべえ、急げ、あいつが死んじゃう！！

バサツツ！！

誰かが魔物を引き裂いた・・・

スパークの伝言

『立てるか？』

『あ、ああ．．．』

ガインは立ち上がり、男を見た。

『ありがとうございます、助かりました。』

　　「たたくガインは今会った人によくそんなにっこり笑えるな．．．」

『なんだ？お前も怪我したのか？』

『いや、俺は違うよ。ちよつと腰がぬけただけで．．．』

　　「．．．やべえ、めっちゃ恥ずかしい。」

『だったらいいが．．．』

ようやく俺の腰がはまって、立つことができた。

『ところでアンタ何者だ？俺の父さんが使う、光希水衝流の剣術にそっくりだったが．．．』

『つてことは．．．あんたが、アレクスさんの息子なのか？』
かなり焦りながら聞いてくる

『ああ、そうだけど．．．』

『ホントか？意外と早く見つかったぜ。アレクスさんから伝言だ早く村に来てな』

『え？でも、なんで．．．』

ガルルル．．．

　　「おいおい、またかよ．．．しかも1匹じゃねえ。」

『お前は、アイツをつれて行け。そこから俺も行くから。』

男はガインを指差す。

『父さんに会ったらなんて言えばいい？』

『スパークがしっかりと伝言してくれたって言っときな。』

レインはうなずきガインを背負って村へ走り出した。

『あと村までもうすぐだ・・・』

だが、村の少し前でレインは足を止めた。

『どうした？』

『村が破壊されてるんだ・・・』

村が完全に破壊されていた。たくさんある家、川を結ぶ橋。なにもかもが壊れ、燃えている・・・

『父さんは？どこにいるんだ？』

『レイン、大丈夫だ。少し落ち着け。アレクスさんは生きてるに決まってるんだろ。』

『落ち着いていられるか!!』

レインはガインを置いて村へ走っていった

なんでだ？なんでこんなことになったんだ？

家に向かって全速力で向かう

いた。父さんだ。

なにやら赤い鎧をきた兵に囲まれてる。

助けなきゃ。俺だって光希水衝流はできるんだ。

右にいた赤い鎧の兵が弓を構えた。

父さんは弓を気にしながら、他の兵の剣を受け止める。

急に矢が輝き始め、ものすごいスピードで飛んでいった。

そして、父さんの体を貫いた・・・。

空白の2日間（前書き）

文章力のなくて
読みづらいと思いますが、
大目にみてください・・・

空白の2日間

『父さ～～～ん!!』

全速力で駆け寄る

なんで？父さんが負けるわけがない。

肺が悪いって言ったって、父さんが負けるわけが・・・

『・・・レインか・・・ということは・・・スパークが・・・』

『ああ！聞いたよ!! とにかく今はしゃべんなくていいから・・・

『この剣を持って逃げる・・・スパークと・・・合流してから・・・

剣を差し出す。

『だから、もうしゃべんなって!!』

『こいつらを・・・倒してくれ・・・スパークがいれば・・・できる・・・』

『なんだ？お前もこの弱いやつ流派なのか？』

『やめとけ。そんなちっぽけな剣術じゃ勝てねえよ。』

赤い鎧をきたやつらが笑いながらしゃべる

これは挑発だ・・・乗っちゃいけない・・・

心ではわかっているのに、状況が状況。

あいつ等を殺すことしか頭に入らない。

『ウオオ~~~~!!』

レインは怒りに任せて、剣を持って赤い鎧に突っ込む。

相手も雑魚じゃないようで、

レインの剣をかわして、ダイヤモンドの陣形に隊を整える。

完全に挑発に乗ってしまい、包囲される

相手も、レインを殺す気満々だ。

『見せてやるよ！お前らが言うちっばけな剣術ってやつを!!』

途端にレインの体が光り始める。

知ってるかのように光りを剣に移して、切りかった。

一振り、たった一振りで4人全員を切り伏せた。

次の目的は・・・

無言で墓を掘り進める。

2日間、飲まず食わずでやってるのに
疲れも、眠気も感じない・・・

「・・・・・・・・・・」

無言でガインが歩み寄ってきた。
両親の墓を作り終えたようだ。

共に両親を失い、放心状態。
しゃべらなければ、考えてもいない。

2人で村人全員の墓が完成させた
全員の埋葬もした・・・

途端に疲れが襲ってくる。
でも二人は抵抗することなく
疲れに任せその場に倒れこんだ・・・

ここは・・・どこだ？

壊れた家・・・・・・・・？

ゆっくり立ち上がる。あの時まったく感じなかった
痛みも今になって襲ってくる。

ここは俺の家か・・・

ゆっくり階段を下りる。

忙しそうに朝食の準備をする母さんも、
ゆっくりコーヒーを飲みながら話しかけてくる父さんもいない……

『おう、起きたか……』

目を腫らせながら、声をかけてきた

『ガインか……』

ガインが俺を、俺の家まで運んだみたいだった。

『こっからどうする?』

『人がいないから村を建て直しても意味ないからなあ……』

俺を運んだことも含めて、

こんな状況でもまず人のための事を考えるか……
すごいなあ、お前は。

ガチャ

スパークが入ってきた。

『ここにいたか、探したぜ……』

『俺の家になんの御用でしょうか?』

『……』

黙ってもなんもわかんねえよ!

ってかあんた何者なんだ?

父さんの知り合いなのか?

聞きたいことは山ほどあった。

しかし向こうからさきに質問が飛んできた。

『俺はあいつらのボスを殺しに行く！お前らも行くか聞きに来たんだ。』

あの時の力

『お前が鎧の奴らを倒したそうだな？レイン』

『俺が見てたけど、すごかったよ！一振りで全員切り伏せちまったんだ。』

もうガインとスパークは仲良し。

友達みたいになっちまつてる・・・まあ歳の差はすくないけど・

・

『実は、あんま覚えてないんだわ・・・あの時の事。』

これはマジな話。信じてもらえっかな。

『俺があいつ等を倒した記憶もねえし、ましてや、そんな一振りでやったなんて・・・』

『覚えてないなんて・・・大丈夫か？お前』

ふう、マジな話だっつーの

こいつらと旅を始めて3日目。だいぶ、慣れてきた。

俺らが追う奴らの情報は全然ないけど、やつらが天空の神の刺客ってスパークが言ってた。

正直、神が敵だなんて・・・全然、想像がつかない。

『おい、レイン！聞いてたか？』

『え？なにが？』

『・・・・・・・・・・・・・・・・』

『も一回説明頼めますかね？スパークさん。』

『さんはいらないうって言ってたんだろ！』

スパークはいつもこんな感じ・・・

年上のくせに敬語はいらんってキレてくる。

まあ、そのおかげで楽に話せるけども・・・

『今度はちゃんと聞いとけよ、レイン!!』

おおつと聞かないとぶっ飛ばされる。

『お前その覚えていなかった事だが、ガインの話を聞く限りアーツを使っただと思う。』

『アーツ・・・?』

『メンタルアーツ。精神の力のことらしぞ。』

ガインの補足が入る。

『で、それがどうかしたのか?』

『あいつらと戦闘する時、そんときにアーツが使えないと相当ヤバイ。』

マジですか・・・そんな力使えないぞ・・・

『と、言うことで今からアースルドの街まで訓練してもらっ。』

『アースルドの街までもう3日もかかんないぞ。』

『だから3日いないに覚えてもらっぜ。』

おおつと、いきなり無茶な横暴で・・・

『まず、アーツを使うためにはそれなりの剣術がいるが、まあその辺は大丈夫だろ。』

『っとそっだ。スパークは光希水衝流の剣術を使うのか?』

これが一番聞きたかったんだ。あゝスツキリ!!

『俺はアレクスさんから習ったんだ。まあ他の剣術も習ってるから

ほぼ我流に近い。』

『じゃあ、スパークさ・スパークはアーツを使えないんじゃないんすか？』

話にくそうだな、ガイン・・・めっちゃぎこちない。

『そんなことはない。剣術がないから使えないんじゃない、剣術がないと力が相手に伝わらないんだ。だから剣術がないアーツはまったく意味がない。』

フムフム。さっぱりわからん。

『じゃあスパークはいろんな剣術を知ってるから1つの型にとらわれなくてもアーツができるってことなのか？』

『まあそうゆうことだな。』

なんとなくわかった気がする、ガインいい質問ありがとう。
でも恥ずかしいから言わないとこつと・・・

『それじゃ始めるぞ。レイン、ガイン。』

『了解。さくつと終わらせますか。』

あの時の力（後書き）

第5章に突入しました。
見てくれた人はコメント
お願いします〜^^

苦痛の3日間

3日目の朝。ほとんどアースルドの街の目の前。

やつのことで基本ができるようになった。

先にガインがコツをつかんだっぽいけど、いかんせん体力がない。スタミナのある俺があとから巻き返していく。という感じで、ほぼ同じ過程で進行していった。

『そんじゃ、最後にアーツを使って俺に攻撃してみろ。』

了解しました。特訓での憎しみも込めて・・・

っと確か、精神を研ぎ澄ませ、刃をイメージ。

それをゆっくり剣に移す・・・

レインの体が光り始め、剣に移る。

そしてそのまま切りつける。

よし、いい感じ。

『まあ、OKだな。まだまだ遅いが、まだ許せる範囲だな。』

マジですか？これ以上早くやれと・・・？

ガインもなんとか、この試練？をパスしたようだ。

『スパークさん、この前レインがやったやつとは何か違う感じがあ
るんだけど・・・。』

『あれは、アーツの応用の技だからな。今のは基本中の基本。』

今ので基本か・・・先が思いやられる・・・。

『どれくらい、効果があるんだ？』 今度はおれの質問。

『まあ、岩を砕くくらいはあると思うぞ。』

おいおい、そんなものを人に使うなんて、死んじまうぞ・・・。

『じゃあそれを見ると、記憶が飛ぶんですか？』

『そうゆう訳じゃない。ただアレは状況がな・・・』

ちらつと俺を見る。

もう俺もガインもあのことについては、だいぶ慣れた。

慣れたっていうか、乗り越えたってやつかな・・・。

『じゃあ、その応用の技は教えてくれないのか？』

『まあ、時期が来たんならな。でもまだ全然早い!!』

と言ってスパークは町に向かって歩き始めた。

後ろ姿を見ると改めてすごいと思った。

キレイな茶髪に、筋肉もかなりある。細マッチョとか言う体系。

それに比べて俺らは・・・。

黒髪に汚い茶髪。(茶色がガインだ。) マッチョとは言いがたい痩せ型。

顔は、ガインはカッコいいけど・・・、俺はどうかわからん。

そんなわけで、やっと町に到着できた。

久しぶりの休息

『はあ、疲れた……。』

2人ともベットに寝転がる。なにせ3日間まったく寝ていない。

『あれ？スパークはどこいったんだ？』

『町で情報収集だって。俺も行こうとしたら、ゆっくり寝てろってさ。』

それではお言葉に甘えて。

2人とも会話が終わると、すぐに眠った。

ふう、けつこう寝たな、今何時だ……？

まだ外は暗い、真昼間に寝たから当然なのだが、何故か戸惑った。もう眠くはない。かなり疲れがとれた気がする。

スパークはまだ帰ってきていない……

やることもないし、アーツの練習でもしますかね……

ガインは……起こさないでおくか。あいつ俺より疲れてたし。

ガインを起こさないように、父さんの剣をもって外に出た。

普段の稽古を竹刀でやっていたため、まだ剣の扱いには慣れないからか、

練習のあとは腕がかなり筋肉痛を起こす。それがまた痛いんだ……

さて、始めますかね。

いつもどおり、精神を集中。最初に比べて、かなり早くなったが、

これでもまだまだ。

自分の手を拳にするくらいの速さじゃないとダメらしい。

この事を考えると、少し頭が痛くなる。まあ当然だが・・・

始めは、かなり練習して、3秒かけてできるようになったアーツ。今では1秒くらいでできるようになっている。

もしかしたら、才能があるのかもな・・・

よくわからない妄想をして、2時間程度訓練をしまくった。そして部屋に帰りもう一眠りした。

『おい、レイン！起きろよ！お前どんだけ寝てんだよ。』

ガイン目覚まし時計で目が覚める。

外が明るい。

さっきは暗かったせいか、何故か感動！ うん！最高！

もう、スパークは帰ってきていた。

眠いのか、ウトウトしている。まあしょうがないことだが・・・

ガインが気を使っで、寝てもいいと何度も言っているのに、断固、寝ようとしなない。

ガインが先に折れたのか、結局寝ないようだ。

眠そうに俺らに話してくる。

『町で聞いた情報だが、あいつらはレザード街に向かって進軍中だそうだ。』

『それは信じていい情報なのか？』

たんなる噂で足を運ぶのはめんどいからな。

『ああ、何せこの街の軍隊の隊長さんに聞いたんだ。かなり有力な情報だと思っていいだろう。』

『というか、よく聞けましたね。それで今から行くんですか？』

『あの隊長さんとは何度も会ってるからな。あと、ガイン。お前まだ剣持ってないだろ？』

確かに、アーツの練習のときはスパークの貸してもらってたけど、

自分用のがないな・・・

『っというわけで、今から買って来い。ここの町は鍛冶には評判があるからな。気に入る剣を探せ。』

『ガイン、今いくらある？』

『俺は、5000Gくらいかな。お前はレイン？』

『2000Gですね・・・』

『でも、俺は父さんのがあるからいいよ。お前は俺の金も使っていないの買って来たらどうだ？』

『それはありがたいんだが、どれがいい剣なのかわかんないんだよ。』

うん、それはそうだな。俺ら剣なんて物と関わりはなかったからな・・・

『スパーク、ガインの剣選び、手伝っ・・・』

おっと、寝てる……。ふう。眠たくないって言うのはウソでしたか……

『仕方ないな。ガイン、2人で行こうぜ。』

『でもなあ・・・』

『大丈夫だって。ここ鍛冶が良いんだろ。だったら大抵の物はいいやつだって。』

しぶしぶガインは俺と外に出て町の店へ買いに行った。

エナジー

『よいしょっと！』

最後の1体を追い払った。

もう、これで4回目。魔物の襲撃にあうのは。

はじめの方はびびったけど、ここまで連続で襲撃されると驚く気も失せる。

もう、めんどくさくて仕方ない。

『ふう、なあレイン。俺らの町からアースルドの町までは魔物の襲撃なんてなかったのに・・・』

『ここら辺の治安が悪いって事だろ。でもさすがに悪すぎるかなあ。ここは街道のと真ん中だぞ。』

ホントに・・・落ち着いて夜も寝れないじゃんかよ・・・

とりあえず、俺らはレザード街に移動中っていう事なんだけど魔物のせいであまり進めないでいる。

距離的には遠くないものの、街道にまで魔物がでてこられちゃあたまったもんじゃないっていうか・・・

とりあえず、ウザイ！ 強くはないのに群れで襲ってくるところがよりム力つく。

『なあ、スパーク。このウルフは食用の肉にできないのか？』

『腹こわしたいなら食ってもいいぞ。食えるやつもいるが食えない奴の方が多い。』

ちえ食えないのかよ。それじゃ倒しても得がないな。

ガインがもう弱音を吐いている。何故か腕を押さえている。

『もう、戦いたくないぜ……。腕が……。』

『お前が、重い剣を買うからいけないんだろ。俺の金まで全部使いやがって……。』

『でも使っていいって、お前がいったんだぞ！』

はい、そうです。けどホントにお前が使うとは思えなかったしなあ。

約10分程度は魔物に会わず快適な旅を送っていた。街道を離れて草原あたりに入った瞬間

見たことのない魔物がこっちに向かってくる

人間の2倍程度の大きさに、たくましい筋肉。姿は人間だな。なんちゅう魔物だ？こりや。

『おっと、エイプのお出ましですか。珍しいな。この辺を住处とするやつじゃないはずだが。』

スパークが解説をしながら驚いてる。

『こいつの筋肉はあなどれないからな……。レイン、ガイン下がってる。俺だけで十分。』

『はあ？ふざけんなよ。コイツくらい大丈夫だって。』

『レインなら倒せんこともないだろう、でも経験が足りなすぎた。下がってるって。』

チツ、こいつと戦ってみたかったなあ。普通の魔物相手にアーツは使ってた。

スパークが言うから、こいつで試したかったのに。

俺なら倒せる？ガインは・・・？ おっともう疲れて無理ってことか。

疲れて俺らの会話にも、口入れてこないからな・・・

おっと。もう戦闘が始まった。

スパークが最初にエイプに接近した。それをでかい腕で防ごうと体の前に腕を持つてくるエイプだが、スパークのほうが上手だった。

剣を持ってないほうの手をエイプに向けると、何故かエイプの防御している手が外れる。

そこをすかさず首筋を切りつける。エイプも知能がないわけじゃないように

違うほうの手で剣を防いだ。

致命傷にはならずしかたなく下がる。さがったスパークを、待つてましたかの如く

ものすごいスピードで飛びかかってきた。でかい腕を思いっきり振り下ろしてくる。

何とかよけて体制を立て直した。

『苦戦してるんじゃない？手伝いましょうか？』

つと俺が交渉してもまったく返事なし。くっそー、大丈夫なのか？

スパークが、ちらつとこっちを見た。

おっと、助太刀OKのサインかな？じゃあ行かせてもらおうか

な。

そのときスパークの体が光り始める。おっアーツか。見てみたかったんだよ。

っていうか、俺にアレだけスピードよくやれって言った割には自分も遅いな。

体の光が消えた。なんだあ使わないのかよ。つまんない・・・

スパークは俺の方に帰ってきた。おいおいエイプはどうした・・・すでにエイプは、胴体を真つ二つにされていた。

オエツ。気持ちわりい

『見えたか？オレのアーツ。まあ見えるわけないか。』

『なんだよ。アーツのスピード全然はやくないじゃんか。俺と同じぐらいだな。』

『お前がやってるアーツとオレのアーツが違うのもわかんねえのか。』

・・・

『何が違うんだよ？いつもと同じ感じだったぞ。』

もう、もったいぶらず教えてくれよ。気になってしょうがない。

『この前、話しただろ？お前があの時やったやつは真似するなって。』

『ってことはもしかして。』

『そうゆうこと。あれがアーツの応用技。エナジーアーツって言うんだ。みんなエナジーって言うけどな』

疲れて口を挟まなかったガインも急に元気になる。

『どうやってやるんだ？スパークさん！』

『何度も言ってるだろ？基本ができない奴は、やっちゃいけないって。』

じゃあ俺らの前で見せるなよな。俺らがやりたくなるのくらいわかってんだろ？

あゝ、はやく基本をマスターしたいな。

『でもレインがやったのとはちょっと違いませんか？』

『あつたりまえだ。エナジーは人それぞれの技だ。俺もできるのはアレだけじゃない。』

それで俺らとの実力の差を見せつけたって訳ですか？

『じゃあ、なんで俺らはアーツを使っちゃいけないんだ？』俺が

聞く

『別に絶対ダメとは言わない。そろそろ使ってもらおうと思ってる。』

『

はじめから、そう言えよ。俺が実戦でおびえらなくても？』

スパークのため息。

ちくしょ！なんだそのため息は

『お前、ウルフとの戦闘で一匹でも殺したか？』

『追い払えって言ったのはスパークだろ？鞘つけたままでっていったのもお前だろ？』

『はじめから、魔物を刺したり、切ったりする感触は、酷だと思っ

てな・・・」

俺も、ガインもゾツとする。確かに。人も魔物もまだ切ったことがない。

街のときは覚えてなかったしな・・・。

『でも、これからは少しずつ、慣れていってもらわなければならない。そうじゃなきゃ実戦で使えんからな。』

剣に付いた、エイプの血を布で拭きながら、ゆっくり先に進み始めたそれに俺らも付いてゆく。

あゝあ、なんか戦うのが怖くなってきた・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2362i/>

天空の奇跡

2011年1月4日14時06分発行